

韓国語および韓国文化学習者の意識に関する調査研究

林 炫情・姜 姫正

(受付 2006年10月11日)

1. はじめに

2002年ワールドカップサッカー日韓共催をきっかけに、日本では様々な韓国の関連情報が、テレビ・雑誌・インターネットなどのマス・メディアで数多く紹介されるようになった。また、最近の「ハンリユウ（韓流）」「韓国ブーム」といわれる社会現象とともに、日本国内における韓国に対する関心の高まりはより一層強くなったといえよう。これは、大学等における韓国語教育の実施状況の拡大傾向や学習者数の増加にも顕著に表れている。財団法人国際文化フォーラムの調査結果（2005）¹⁾によると、4年制大学における韓国語教育の実施校の割合は、1995年度から2002-03年度までの期間に、全体で25.3%から47.7%と22.4ポイントも増加している。また、この間、国立大学で30ポイント以上増え、60%近くになっているという報告は注目に値する。その一方で、全国の大学で韓国語を学ぶ学生数はすでに頭打ちになっているとみる大学関係者もあり²⁾、韓流ブームに乗った韓国語学習熱は大学内では冷えつつあるのも事実である。そのため、韓国語および韓国文化教育の現状や課題を把握し、今後の大学における韓国語および韓国文化教育のあり方を再考する等の対応が関係者に急がれているように思われる。

そこで本稿では、今後の大学における韓国語および韓国文化教育を展望するための第一歩として学習者の意識を明らかにし、それを今後の検討のための材料とすることを目的とする。本調査では、2005年度広島修道大学の「基礎韓国・朝鮮語」と「韓国・朝鮮文化論」を履修した学生を対象に、それぞれの科目に対する学習動機、学習目標、興味分野等についてたず

1) 財団法人国際文化フォーラムは、2003年1月に韓国・朝鮮語教育に取り組んでいたと思われる大学等（2000年度に開設していたか、2001年度以降に開設された可能性がある大学等）を対象に、インターネットを利用したアンケート方式による韓国・朝鮮語教育の実施状況を調査したものである。

2) 以下では、毎日新聞（2006年6月12日付け）に紹介された大学関係者のことばを引用しておく。（前略）例えば同志社大の新入生の受講者は約560人、前年から約100人減った。「03年以降、毎年5割ずつ増え、クラスも増設してきましたが……」（油谷幸利・同志社大言語文化教育研究センター教授）。早稲田大では新年度の全学年の受講者は約1800人、同じく右肩上がりだったのが初めて横ばいになった。もともと受講者数の少ない東大でも似たような現象が起きている。新入生で選択した学生は04年度が104人、05年度は87人、今年度は70人にまで減った。「韓流ブームであまりにも言語がメジャーになりすぎ、学生は好奇心を失い、敬遠したのかもしれませんがね」と生越直樹・東大大学院総合文化研究科教授は話す。

ねた。アンケートの質問項目は、金（2004）の「韓国・朝鮮語教育の現状と学習者の意識に関する調査研究」³⁾を参考にしたが、「基礎韓国・朝鮮語」および「韓国・朝鮮文化論」の授業目標と授業形式が異なることを考慮し、それぞれの科目別に質問項目を多少変えて調査を実施した。以下では「韓国・朝鮮語（以下、韓国語）」学習者の意識に関する調査と「韓国・朝鮮文化（以下、韓国文化）論」学習者の意識に関する調査の二つに分け、それぞれの調査結果を報告していく。

2. 「韓国語」学習者の意識に関する調査

2.1 広島修道大学における「韓国語」教育

広島修道大学では、現在開講されている外国語のうち、英語と日本語（留学生等が履修）を除く、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語、ロシア語の6つの言語が初修外国語として開設されている。韓国語が初修外国語として初めて開設されたのは1991年度からで、その履修者数は2002年度を境に著しく増加し、2005年度は48クラス、1717名（延べ人数）まで増えている⁴⁾。これは、初修外国語全履修者の割合からすると24.1%を占めており、中国語（2924名、41%）に次ぐ数値である。図1は、2000年度から2005年度までの広島修道

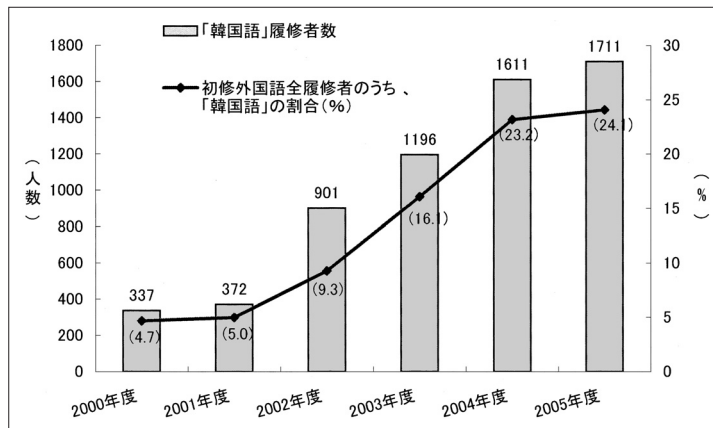


図1 広島修道大学「韓国語」履修者の推移

注. 履修者数は「韓国・朝鮮語Ⅰ」～「韓国・朝鮮語Ⅳ」延べ人数，再履修生含む。

- 3) 金（2004）は、愛知県所在教育機関の日本人および在日韓国・朝鮮人学習者を対象とし、韓国・朝鮮語教育の現状と学習者の意識を調査し、両者間で相違点があるかどうかを分析したものである。
- 4) 履修者数は、「韓国・朝鮮語Ⅰ」から「韓国・朝鮮語Ⅳ」までの延べ人数である。広島修道大学の2005年度全学共通の韓国・朝鮮語Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳの開講時期と単位数は下記のとおりである。

韓国・朝鮮語Ⅰ（前期），韓国・朝鮮語Ⅲ（前期）
 韓国・朝鮮語Ⅱ（後期），韓国・朝鮮語Ⅳ（後期） 各1単位

大学における「韓国語」履修者の推移を示したものである。

2.2 調査概要

調査は、2005年12月、広島修道大学の「基礎韓国・朝鮮語Ⅳ」履修者412名を対象に韓国語学習者の意識および認識に関するアンケート調査を行い、340名（女性144名、男性184名、無回答12名）から回答を得ることができた（有効回収率、82.5%）。

アンケートでは、「韓国語」学習者の意識を探るため、韓国語の学習動機、ことばのイメージ、学習に対する意識（学習目標、学習経験、学習時の難しい点）、そして韓国に対する認識・関心・興味などを中心に調査を行った。大学における初修外国語教育は、言語だけではなく個別言語圏の文化を学ぶこともその目的の一つである。故に、学習者が、どのくらい目標言語の国のことを知っているか、またどのような分野に興味を持っているかを把握しておく必要があると考え、調査では韓国語だけではなく目標言語の国に対する認識・関心・興味等の質問項目をも設定した。

2.3 学習者の学習動機

学習者の学習動機については17の質問項目を作成し、それぞれの項目に対して、「とてもそう思う」「ある程度そう思う」「どちらとも思わない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5段階尺度で尋ねた。点数化するにあたり、「とてもそう思う」を4、「全くそう思わない」を0とし、0から4までの変数として扱った。つまり、得点が高いほど学習動機が強いことを意味する。図2は、各質問項目ごとの平均（以下、Mと示す）と標準偏差を示したものである。韓国語の学習動機の質問項目において、得点が2.5以上と比較的学習動機が高かった項目をあげてみると、「韓国語に興味をもっているから」(M=2.94)、「おもしろそうだから」(M=2.87)、「学びやすいから」(M=2.75)、「韓国の文化を理解するため」(M=2.59)、「日本に一番近い国だから」(M=2.55)、「韓国が好きだから」(M=2.50)などである。このことから、韓国語学習者は韓国語にかなりの興味をもち、また韓国語を学びやすい言葉として認識している傾向が強く、言語だけではなく、目標言語の文化についても興味をもっていることがある程度うかがえる。一方、「友達・恋人などとのコミュニケーションに必要なから」(M=1.31)、「北朝鮮のことをニュースで聞いてから」(M=1.47)、「日本人の芸能人がしゃべるのを聴いてかっこいいと思い自分もそうなりたいから」(M=1.55)、「韓国のドラマを見てから」(M=1.77)等の項目は、得点が低く、韓国語の学習動機の要因としてはそれほど強く影響していないことが分かった。

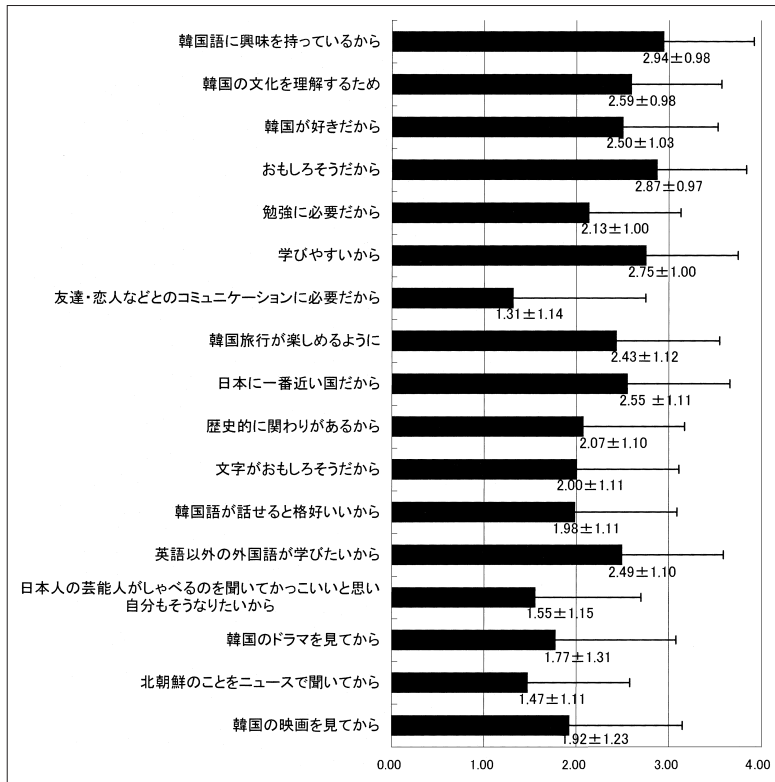


図2 「韓国語」学習者の学習動機

注. 棒グラフは「韓国語」学習動機の平均値。また、±の後の数値と棒グラフ上の線は標準偏差を示す。

2.4 学習者の韓国語に対するイメージ評価

韓国語の学習者の意識を支えている背景を探るため、本調査では心理学である事柄や事象が担っている意味を確かめるために使う SD 法 (Semantic Differential Method) を用いた。

質問紙では、「きたない／きれい」「聞きにくい／聞きやすい」「親しみにくい／親しみやすい」「非能率的／能率的」「堅い／柔らかい」「嫌い／好き」「重苦しい／軽快」という7つの評価語で韓国語に対する印象を尋ねた。ことばのイメージ評価は-2から2までの変数とし、5段階で評価してもらった。「きたない／きれい」の場合、数値が2に近いと「きれい」、-2に近いと「きたない」と判断する傾向が強いことになる。韓国・朝鮮語に対する学習者のイメージは、図3が示すように、「聞きにくい／聞きやすい」の項目でやや聞きにくい、「堅い／柔らかい」の項目でどちらともいえないと感じている反面、その他の項目については「きれい」, 「親しみやすい」, 「能率的」, 「柔らかい」, 「好き」, 「軽快」のイメージが強いことがわかった。特に、「好き／嫌い」(M=0.72), 「親しみやすい／親しみにくい」(M=0.60)の項目は肯定値が高く、韓国語については好きで親しみやすいと感じているようである。

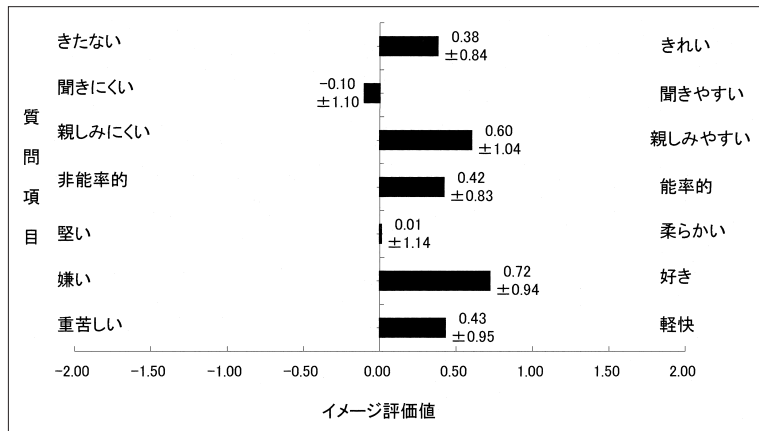


図3 「韓国語」学習者の韓国語に対するイメージ評価

注. ±は標準偏差。韓国語に対するイメージ評価値は、2から-2までの変数。

2.5 学習者の学習目標

学習者の学習目標を調べるため、「どのくらいまで韓国語を勉強するつもりであるか」について尋ねた。学習目標については、「簡単な字が読めるくらい」「あいさつ程度できるほど」「旅行などに必要な決まりきった表現が使える程度」「日常会話ができる程度」「どんな時でも不自由なく話せる程度」「母語と同じように、完璧に話せる」の中から一つ選ぶようにした。その結果、図4で分かるように日常会話ができる程度以上の高い目標をもっている学習者は3割程度にとどまっており、7割は「簡単な字が読めるくらい」「挨拶程度できるほど」「旅行などに必要な決まりきった表現が使える程度」に学習目標を設定していることが分かった。これは、2.3の学習動機の項目で、学習動機として比較的高かった韓国語に関する興味がただ

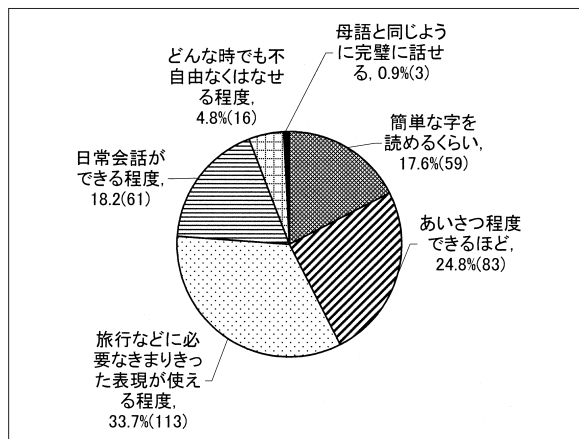


図4 「韓国語」学習者の学習目標

注. 括弧内は回答数を示す。

一過性のもので終わってしまう可能性をも示唆しているだけに、今後の韓国語教育を考えるうえで看過できない結果であると思われる。

2.6 学習体験に対する感想

韓国語の学習経験に対する感想については、「思ったよりやさしい」「思ったとおりやさしい」「どちらとも思わない」「思ったより難しい」「思ったとおり難しい」の選択肢から一つ選ぶようにした。その結果は、図5が示すとおり「思ったより難しい」「思ったよりやさしい」がともに30.6%を占めており、次に「どちらとも思えない」が21.4%、「思ったとおりやさしい」が13.4%、「思ったとおり難しい」が4.5%の順であった。これを難しいか難しくないかに分けてみると、全体的に難しい（35.1%）よりはやさしいと感じる（43.7%）傾向が強いことがわかった。

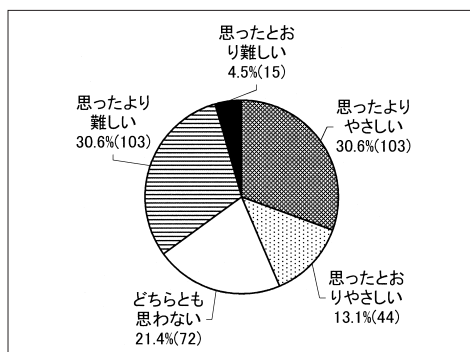


図5 「韓国語」学習経験に対する感想

注. 括弧内は回答数を示す。

2.7 学習時の難点

学習時の難点については、韓国・朝鮮語学習の難点として一般にあげられている「発音」「文法」「単語暗記」「聞き取り」「発音の変化」「読み方」「書き取り」「文字の複雑さ」「パッチム」⁵⁾を取り上げ、そのなかで何をもっとも難しいと思うかを質問した。その結果は、図6に示したとおりである。「発音の変化」「読み方」「パッチム」を発音の際の難点と関連づけて考えると、「発音」が50.9%として最も高く、次が「単語暗記」(31.4%)、「聞き取り」(15.1%)、「書き取り」(12.1%)等の順で難しく感じる事がわかった。一方、「文法」

5) 韓国語の文字であるハングルの組み合わせは、「子音字+母音字」と「子音字+母音字+子音字」の2種類がある。最初に発音する子音を「初声(しょせい)」, 初声と共に発音される母音を「中声(ちゅうせい)」, 最後にくる子音を「終声(しゅうせい)」または「パッチム」という。「パッチム」は次の音節と連続して発音するとき、一定のルールに従って音変化が起きる。初級レベルの学習者の場合、音節が文字通りに発音されないことに最初のうちは戸惑ってしまうことが多いようである。

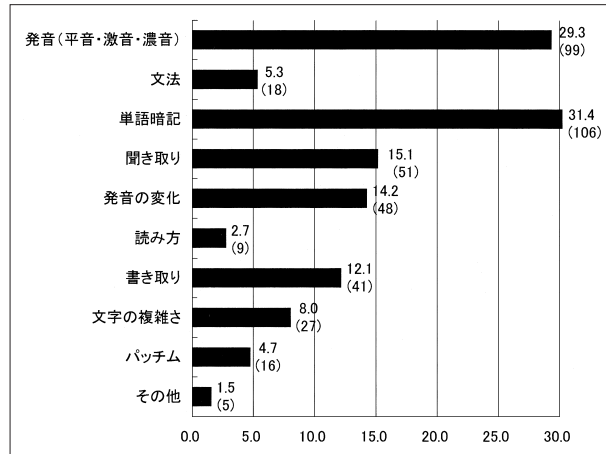


図6 「韓国語」学習時の難点
注. 括弧内は回答数を示す。複数回答あり。

(5.3%) については、日本語と語順が同じであることもあり、学習時の難点として考えている人は特に少ないようである。

2.8 韓国に対する認知度

学習者の韓国に対する認知度を調べるため、「韓国のことをどのくらい知っているか」と尋ねた結果、図7が示すように、「よく知っている」2.7%、「まあまあ知っている」21.4%、「どちらとも言えない」38.9%、「あまり知らない」34.4%、「全く知らない」2.7%という結果が見られた。つまり、韓国に対する認知度については、24.1%の学習者が知っていると感じているのに対し、37.1%の学習者は知らないと感じていることがわかった。最近、日本国内では韓国関連情報がメディアで数多く紹介されるようになり、学習者が韓国語や韓国文化

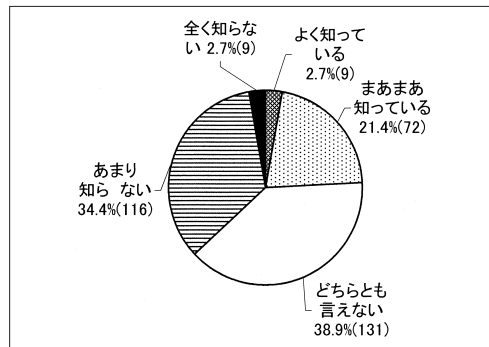


図7 「韓国語」学習者の韓国に対する認知度
注. 括弧内は回答数を示す。

に触れる機会はかなりあると思われる。しかし、まだ4割近くの学習者は韓国に対しては知らないと感じていることは興味深い。

2.9 学習者の韓国に対する関心度および興味分野

学習者の韓国に対する関心度および興味分野は、図8と表1に示したとおりである。まず、関心度をみると、「とても関心がある」17.2%、「ある程度関心がある」57.3%、「どちらともいえない」18.1%、「あまり関心がない」5.3%、「全く関心がない」2.1%であることがわかった。韓国について関心があると答えたのは7割をこえており、韓国・朝鮮語を学習目標としている学習者は、韓国についても高い関心を示していることが明らかになった。

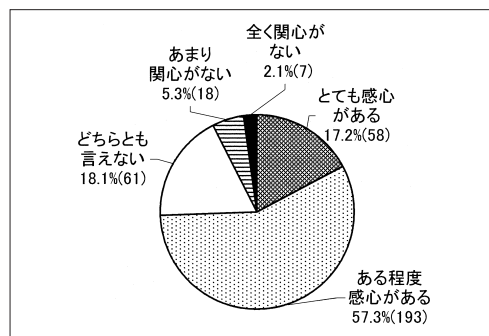


図8 「韓国語」学習者の韓国に対する関心度
注. 括弧内は回答数を示す。

表1 「韓国語」学習者の韓国に対する興味分野

ID	興味分野	回答数 (%)
1	食べ物	214 (63.7)
2	民族衣装	37 (11.0)
3	歴史	77 (22.9)
4	北朝鮮	55 (16.4)
5	音楽	78 (23.2)
6	ファッション	33 (9.8)
7	政治	34 (10.1)
8	経済	36 (10.7)
9	観光地	106 (31.5)
10	韓国人の見方・考え方	110 (32.7)
11	ドラマ・映画・美術・文学	153 (45.5)
12	教育や技術	31 (9.2)
13	その他	13 (3.9)
合計		977 (100.0)

注1. 複数回答あり

興味分野については、表1で示したように「食べ物」(63.7%)がもっとも多く、次いでドラマ・映画・美術・文学(45.5%)、韓国人の見方・考え方(32.7%)、観光地(31.5%)等の順である。一方、教育や技術、ファッション、政治、経済に対する関心は比較的に低いことがわかった。このような学習者の興味分野の順位は、最近の韓国ドラマや映画等の韓流ブームの影響も背景にあるものと思われる。

3. 「韓国文化論」学習者の意識に関する調査

3.1 広島修道大学における「韓国・朝鮮文化論」の授業目標と意義

文化は時代を反映しながら、時と共に変貌と成長し続けているものである。「近くて遠い国」と言い古された韓国は日韓ワールドカップ共同開催や日本における韓流ブームなどで日本人にとって身近な隣国としての存在感を示すようになった。また、韓国の食べ物であるキムチ、焼肉、ビビンパなどが食通を唸らせているだけではなく、韓国のドラマや映画の面白さに惹かれている、いわゆる「韓国通」と称される人々も増えてきた。さらに、韓国への渡航目的も、韓国文化への興味・関心の高まりとともに単なる観光型から韓国文化の体験型へと変貌しつつある。しかし、大学生の場合はテレビやラジオや新聞や雑誌や本などのメディアを通して韓国の文化に間接的に触れることが多いため、情報源によっては韓国の文化に対する偏った考えを持ちうる可能性も十分考えられる。そのため、情報の受け手となる学生は、韓国に関する氾濫する情報の中から韓国文化を的確に理解しながら正しく隣国としての韓国を理解していく能力を養う必要がある。そこで、「韓国・朝鮮文化論」の授業では、概説的な講義およびビデオ、雑誌、音楽などの視聴覚教材を用いて様々な角度から韓国文化を考察しながら韓国社会における文化の諸様相についての理解を深めることを目標とする。また、授業では学習者自ら最も興味のあるテーマを取り上げ、自分で調べた内容を発表し、その中での疑問点、感想などを一緒に議論しながら、日本とどのような類似点と相違点があるかについて議論ができるようにしている。

本アンケートを実施した2005年度は、次のいくつかの要因も重なり学習者の韓国に対する興味が一層高まった年であったと思われる。まず、授業では、前期と後期にわけ2人の教員が授業を担当し、また講義の後半からは韓国からの交換留学生3名を交えて両国の意識の相違点についての議論を積極的に行った。さらに、2005年が日韓の国交正常化40周年にあたる年で日韓友好年でもあったため、メディアでは韓国に対する特番が組まれたり、様々なイベントが催された。特に、広島修道大学では、韓国の啓明大学と共催で韓国式大綱引き大会が開催され、韓国の文化を間近に感じながら韓国の同年代の大学生との交流を深める機会もあったため、学習者は授業以外の場でも韓国の文化に接する機会が特に多かった年であったといえる。

3.2 調査概要

本調査は、2005年12月、広島修道大学の教養ゼミナール A「韓国・朝鮮文化論」履修者17名を対象にしたものである（有効回収率、100%）。アンケート調査では、①学習動機、②韓国に対するイメージ評価、③韓国に対する関心度、④興味分野などの項目を設定した。また、履修生の中には、実際韓国人と交流をしている場合もあることを考え、自由記述式として、⑤韓国人との交際において気を遣う点についても回答を求めた。アンケート調査としては少ない数ではあるが、履修者全員の回答を得ており、文化論学習者の韓国文化に対する意識がある程度把握することはできると考えている。以下で、項目別にアンケート調査結果をみることにする。

3.3 学習者の学習動機

「韓国文化論」の学習者の学習動機については、「韓国語」の学習者に対する質問項目と同じく17項目を設定し、それぞれの項目に対して「とてもそう思う」、「ある程度そう思う」、「ど

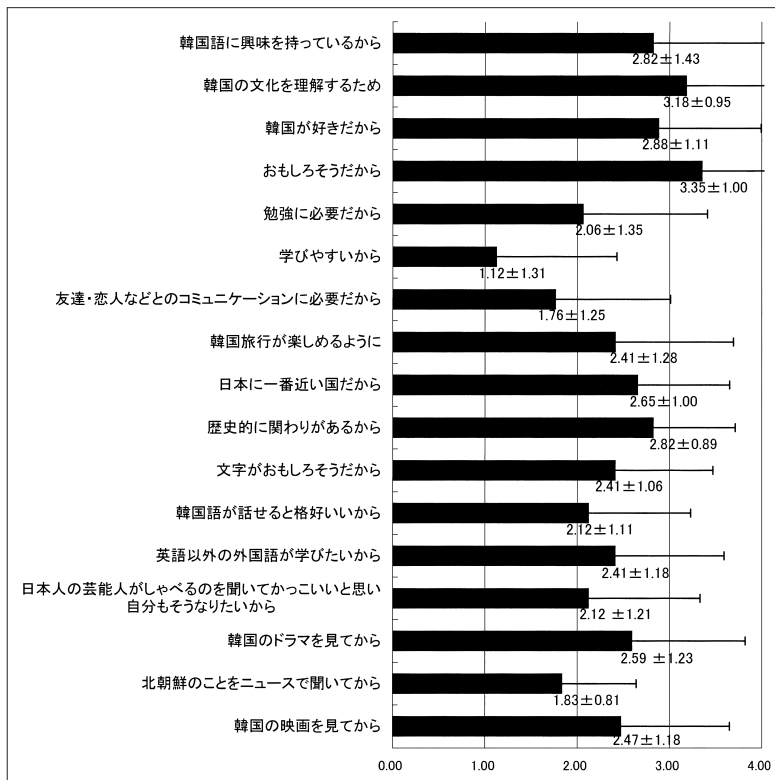


図9 「韓国文化論」学習者の学習動機

注. 棒グラフは「韓国文化」学習者の学習動機の平均値。また、±の後の数値と棒グラフ上の線は標準偏差を示す。

ちらとも思わない」、「あまりそう思わない」、「全く思わない」の5段階評価を行い、それぞれの評価について4から0まで点数を与えて分析を行った。すなわち、点数の平均値が高ければ高いほど学習動機が強いことを意味する。

調査結果は、図9に示したように「韓国文化論」学習者の学習動機が比較的が強かった（平均値が高い）のは、「面白そうだから」(M=3.35)、「韓国の文化を理解するため」(M=3.18)、「韓国が好きだから」(M=2.88)、「歴史的に関わりがあるから」(M=2.82)、「韓国語に興味があるから」(M=2.82)、「日本に一番近い国だから」(M=2.65)などの順になっていた。韓国語学習者に比べ、韓国文化論の学習者は韓国及び韓国文化に関する日本における固定概念にとらわれず、隣国として韓国文化や歴史を正しく理解しようとした傾向がより強いようである。また、韓国語学習者に比べ、「韓国の映画をみてから」(M=2.59)、「韓国のドラマをみてから」(M=2.47)の項目の得点が高く、近年社会現象ともいえる韓流ブームも学習動機を駆り立てているようである。

3.4 学習者の韓国に対するイメージ評価

学習者の韓国に対するイメージを「無礼／礼儀正しい」、「感情的／理性的」、「親みにくい／親しみやすい」、「不親切／親切」、「信頼できない／信頼できる」、「嫌い／好き」、「内向的／社会的」といった7つの項目について、2から-2までの5段階でイメージ評価の調査を行った。つまり、値が高いほど肯定的評価を得られていることを意味する。図10で示すように、0を基準とし、右よりは肯定的な評価を、左よりは否定的な評価を表している。

調査結果をみると、韓国に対するイメージ評価の中で、「感情的／理性的」(M=-0.35)という項目に限って、ややマイナスのイメージがあることがわかる。また、「信頼できない

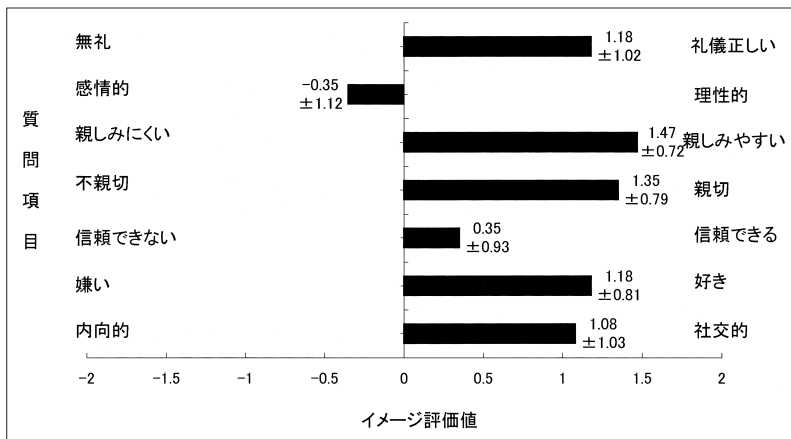


図10 「韓国文化論」学習者の韓国に対するイメージ評価
注. ±は標準偏差。韓国に対するイメージ値は2から-2までの変数。

「信頼できる」(M=0.35)の項目はかろうじてプラスイメージを持っているものの、韓国に対する信頼度は決して高いとは言い難い。その他の項目である「親しみにくい／親しみやすい」(M=1.47), 「不親切／親切」(M=1.35), 「無礼／礼儀正しい」(M=1.18), 「嫌い／好き」(M=1.18), 「内向的／社交的」(M=1.08)などにおいては高い値を示しているため、プラスのイメージをもっていると言える。これらの調査結果から、韓国に対するイメージは、好きで親しみやすいと感じており、礼儀正しく社交的であると思っている反面、やや感情的であると判断している。また、信頼することに対しては信頼できるに傾いているものの、その数値が示すように強い信頼感はないことが示唆された。

3.5 学習者の韓国及び韓国人に対する関心度

学習者の韓国及び韓国人に対する関心度は図11で示すように、「とても関心がある」が52.9%でもっとも高く、「ある程度関心がある」の35.3%を含めると関心があると答えた人は9割を超え、学習者のほとんどが韓国及び韓国人に高い関心を寄せていることが分かる。ちなみに、「どちらとも言えない」と「あまり関心がない」はそれぞれ5.9%であった。

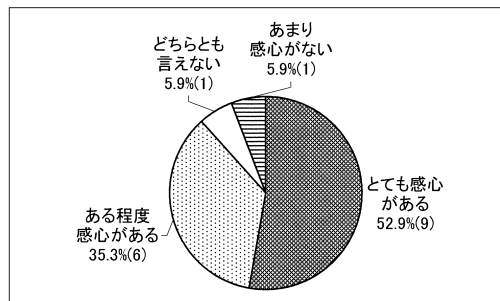


図11 「韓国文化論」学習者の韓国および韓国人に対する関心度
注. 括弧内は回答数を示す。

3.6 学習者の韓国に対する興味分野

学習者の興味分野については、履修前と履修後に分けて質問を行った。表2で示すように、学習者は履修前において「韓国人の見方・考え方」(17.6%), 「食べ物」(11.8%), 「歴史」(11.8%), 「ドラマ・映画・美術・文学」(10.3%), 「音楽」(8.8%)などの順に興味を持っていたが、履修後は「韓国人の見方・考え方」(19.4%), 「歴史」(17.7%), 「ドラマ・映画・美術・文学」(11.3%)・「政治」(11.3%)の順になり、若干変化が見られた。特に、「歴史」や「政治」についての興味は、履修前と比べ履修後にそれぞれ5.9ポイント、3.9ポイントずつ高くなっている。しかし、履修前後ともに韓国人の見方や考え方に最も興味があると答えている点は大変興味深い。

表2 「韓国文化」学習者の興味分野

項 目	履修前	履修後
	回答数 (%)	回答数 (%)
1 食べ物	8 (11.8)	6 (9.7)
2 民族衣装	2 (2.9)	1 (1.6)
3 歴史	8 (11.8)	11 (17.7)
4 北朝鮮	4 (5.9)	1 (1.6)
5 音楽	6 (8.8)	5 (8.1)
6 ファッション	4 (5.9)	2 (3.2)
7 政治	5 (7.4)	7 (11.3)
8 経済	3 (4.4)	3 (4.8)
9 観光地	4 (5.9)	1 (1.6)
10 韓国人の見方・考え方	12 (17.6)	12 (19.4)
11 ドラマ・映画・美術・文学	7 (10.3)	7 (11.3)
12 教育や技術	3 (4.4)	6 (9.7)
13 その他	2 (2.9)	0 (0.0)
合 計	68 (100.0)	62 (100.0)

注1. 複数回答あり

2003年6月の日韓首脳会談で、両首脳は、日韓外交正常化40周年にあたる2005年を「ジャパン・コリア・フェスタ2005」（愛称：「日韓友情年～進もう未来へ、一緒に世界へ～」）とし、日韓両国で各種交流事業を実施し、前向きに日韓関係を考えていくことに合意した。しかしながら、アンケート調査を行った2005年は、社会的現象でもあった韓流ブームなどの影響を多く受けた年であった一方、竹島（韓国名：独島）問題、靖国参拝問題、歴史教科書問題等と政治的問題と絡んだ外交上の日韓関係の悪化がメディアを通じて登場し続けた年でもあった。そのため、学習者の学習後の興味分野が「韓国人の見方・考え方」「歴史」「政治」の順に変わったと考えられる。これは、韓国人の見方や考え方を理解した上で、歴史や政治をめぐって生じる日韓関係の諸問題を考えて行こうとする学習者の姿勢が強く表われているものと思われる。

3.7 韓国人との交際において気を遣う点

「韓国・朝鮮文化論」の学習者の特徴の一つは、韓国語の学習経験がある学生、韓国に旅行経験のある学生など、以前から韓国とつながりを持っている学生が多いことである。韓国に興味があるゆえに、全くの非学習者よりは韓国人に接する機会も少なくないと考えられる。この点を踏まえて、学習者が初対面を含み、韓国人と付き合う際にどのような点に気を遣うかについて自由記述式で回答を求めた。その結果、答えは「全く気を遣わない」と「気を遣う」との両極端に分かれた。「全く気を遣わない」と記述した回答をまとめてみると、同じ

血の通った人間として、先入観を持たず興味や好奇心を持ち、なるべく自然体で接するように心がけていることを主な理由としてあげている。一方、「気を遣う」と答えた意見の多くは、目上の人と接する際の心配りや習慣の違いによる文化の相違点などがあげられている。また、話題として日韓の歴史問題に触れる際に細心の注意が必要であることの回答もいくつかあった。これに関して歴史問題にはなるべく触れないように努力するといった消極的な姿勢の回答もあった。韓国人と付き合いにおいて、人と人の付き合いというより、韓国の文化、言い換えれば異文化交流及び理解という側面に重点をおけばおくほど、学習者はより気を遣う傾向が強いことが分かった。

4. お わ り に

以上、広島修道大学「基礎韓国・朝鮮語」および「韓国・朝鮮文化論」学習者を対象にしたアンケート調査に基づき、韓国語および韓国文化論の学習者の意識実態について考察を行った。

まず、韓国語学習者の意識の実態では、韓国語の学習目的について平均値の特に高い肯定的な項目は、「韓国語に興味をもっているから」「おもしろそうだから」「学びやすいから」「韓国の文化を理解するため」「日本に一番近い国だから」などである。また、学習目標言語に対するイメージは、「好き」「親しみやすい」「能率的」「軽快」というイメージを持っているが、「聞きにくい」言語であると評価していることがわかった。具体的な学習目標については、日常会話ができる程度以上の高い目標をもっている学習者は3割程度にとどまっており、7割は「簡単な字が読めるくらい」「挨拶程度できるほど」「旅行などに必要な決まりきった表現が使える程度」に学習目標を設定していることが明らかになった。韓国語の学習経験に対する感想では、全体的に難しいと感じるもの(35.1%)よりもやさしいと感じるもの(43.7%)が多かった一方、韓国語学習時の難点としては、「単語暗記」「発音」「聞き取り」などが多くあげられた。また、目標言語の国については、知っている(24.1%)と答えた学習者よりも知らない(37.1%)と考えている学習者が多かった。しかし、関心度をみると、学習者の7割以上が韓国に対して関心があると答えており、特に食文化や韓国人の行動様式や考え方に関わる文化的な面により強い興味を持っていることが分かった。韓国・朝鮮語教育のなかで、こうした韓国の文化に対する学習者の興味分野を積極的に導入することにより、学習者の学習動機をより一層向上させることができるであろう。

次に、韓国文化論学習者の意識の実態では、学習者の9割以上が韓国に対して関心を持っており、韓国社会における様々な分野だけではなく、歴史や政治をめぐる日韓関係のあり方まで関心が及んでいることが分かった。韓国に対するイメージとしてはやや感情的であると

判断しているものの、好きで親しみやすいと感じており、礼儀正しく社会的であると評価していることが分かった。学習者の興味分野では、「韓国人の見方・考え方」に最も高い興味を寄せており、「歴史」「政治」等について真剣に直視しようとしていることが分かった。

本稿の調査においては、学習者の専門および学習環境といった属性についてはあえて排除したうえで、調査を行った。しかし、学習者の専門と学習環境、つまり韓国・朝鮮を専門領域としているかどうか、そして学習者が普段韓国人や韓国文化に接しやすい環境にいるかどうかによって、学習者の韓国語や韓国文化に対する意識は大きく異なることが予測される。今後は、調査対象者の属性を考慮した質問項目を設定し、調査・分析していきたいと考えている。

参 考 資 料

- 日本国際文化フォーラム（2005）『調査報告 日本の学校における韓国朝鮮語教育：大学等と高等学校の現状と課題』http://www.tjf.or.jp/korean/chousa/ch2005_j_0101.htm
- 日本国際文化フォーラム（2005）『国際文化フォーラム通信』65 「外国語教育の変化と韓国朝鮮語」国際文化フォーラムホームページ
- 金由那（2004）「韓国・朝鮮語教育の現状と学習者の意識に関する調査研究：愛知県所在教育機関の日本人および在日韓国・朝鮮人学習者を対象として」『ことばの科学17』名古屋大学言語文化研究会
- 毎日新聞（2006年6月12日付）「ハングル熱、冷めた？ 受講者数頭打ち、テキスト売れず」
<http://www.mainichi-msn.co.jp/tokusyu/shiritai/archive/news/2006/06/20060612dde001040047000c.html>